第54号　50円
昭和53年5月25日

内　容

国際社会のなかの日本人…… 1
第36回理事会…… 2
千人会…… 3
第5回国際学生セミナー…… 4
第97回大学共同セミナー…… 6
故今村護郎先生追悼会…… 7
私の大学生活とセミナー・ハウス 8
寄付金報告…… 9　寄贈図書… 9
館長日記から……11
事業部だより…10　利用状況…11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
<所在地>
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京　74590番
<東京事務所>
東京都中央区日本橋本町3—3
三井銀行本町支店ビル5階
電話　東京　(241)3961
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

国際社会のなかの日本人

国連大学副学長　武者小路　公秀

国際社会のなかの日本人というテーマは、私自身が国連大学において日常抱えている問題であるが、ここではそれを少し押し広げて、いくつかの考え方を提示し、皆さんの討論のご参考にしたい。

まず、この問題を考えるに当たって、国際社会が、いま非常に大きな転換の時期に来ているということを確認する必要がある。このことの意味は、国際社会が西欧世界の膨脹という形で西欧文明を抱え込んでしまったことによる反作用が現在起こっているということである。特にラテン・アメリカの経済学者たちが提起した考え方に従えば、西欧文明による工業化は国際社会を、工業化の進んだ西欧という中心部分と、工業化の波が後から入ってきた後発の諸国、つまり周辺と呼ばれる部分に分けてしまった結果、周辺の部分は、中心の部分から種々の工業化の恩典に浴しようとして、中心の真似をし、そのことによって逆にますます中心への従属を深めてきた。しかし、ここで周辺の国々は自分たちの文化というものを再発見し、経済の自立や政治の独立を強く主張するようになった。言いかえれば、南北問題は単に経済的な問題だけでなく、中心に対する周辺の一つの自己主張としてとらえなければならない。これらの問題は国際政治上の動きだけではなく今日の社会科学一般においても土着的社会科学の発見、発掘ということで重要視されてきているのはご承知のとおりである。こうして国際社会は、これまでの単に西欧の文明を受け入れる器としての国際社会から、西欧文明以外の諸々の文化的伝統、ものの考え方、人間の生き方を大切にした、本当に普遍的な地球社会というものへ動き始めたということができよう。

それではこのように、いま生まれようとしている新しい国際社会のなかで、日本はどのように位置づけられるのか、また、どのような日本人の役割を見出すことができるであろうか。日本という国にいるということが日本人の特徴であるから、私はまず、日本の問題を考え、次に日本人の問題、そして最後にそれを組み合わせて、国際社会のなかの日本人という問題を、特に大学との関連で述べてみたいと思う。

西欧世界の膨脹が拡大していく中での日本の反応は、他の大部分の非西欧諸国が植民地化という形で西欧化されたことを考えると、非常に特殊な例となって浮かび上がってくる。いわゆる第三世界においては指導者層は西欧的な教育や訓練を受け、西欧的な経済、政治、あるいは行政組織の中に巻き込まれてきた。彼らがその従属的な地位に飽き足らずに独立をし、新国家を創造しようとしているという状況が現在生まれているが、これらの諸国の指導者層は、依然として非常に西欧的な生活をし、イギリスやフランスで教育を受け、例えばインドなどは相当数が国連の諸機関で働いているけれども、一般の国民とのギャップは非常に大きい。これに対して日本は、地理的・歴史的諸条件によって、明治以来、植民地化されずに西欧の知識や技術を取り込み、今日、高度経済成長というものを日本の中で形づくることができた。それは、外との接触が二つに分かれていたからである。植民地化されなかった日本では、外交や貿易に携わる人々は外国語を直接話し、外国人と付き合うことのできる層であって、その数は非常に限られていた。しかし外国語を話すことはできなくても読むことのできるインテリが数多くおり、書物を通して外国の文物を知ることができた。しかもかれらと一般民衆との隔絶は他の非西欧諸国ほど見られなかった。これが日本を垂直の社会にしたが、逆にかれらインテリと、外国人と付き合う人々とのギャップが非常に大きく、いまもってこれらの人々は日本の国内では特殊な日本人とみなされがちであり、国際社会においては、日本を閉鎖社会にしているのである。

こうして、われわれ日本人は日本という国を切り離して自分自身を考えることができないということから、いわゆる日本株式会社論が唱えられ、仲間内と仲間外とを区別することによって、均質な社会を形づくることに成功したのである。しかし、ある著名な北欧の未来学者は言っている。「日本人は、いろいろな知恵を持っているのに、日本のためにしか、その知恵を使わない傾向がある。したがって、その知恵が役立つためには、おそらく日本沈没が起こった方がよい」と。つまり、物事を穏便に収拾する技量とか、多元性に対する寛容さとかいう長所を、日本の利益のためだけではなく、地球社会の一員として、人類全体のために役立てるべきだというのである。

次にこの日本人の問題を、国際社会のなかで日本人はどのような役割を果たさなければならないかという観点から考えてみると、次のように整理することができると思う。

第一に、今日の変貌を遂げつつある世界を十分に理解することが必要である。日本においては、西欧的なものは観念としては入って

（次ページ4段目へつづく）

第36回理事会

昭和53年3月14日／丸の内銀行クラブ

諸施設・設備の改修工事費の増大で長期的な財政計画の必要迫まる

——52年度決算見込から学ぶ——

〈出席者〉川喜田愛郎、上代たの、中村哲、村井資長、福原満洲雄、ヨゼフ・ピタウ、飯田宗一郎、海老沢義道、委任状出席者一四名。

〈議事〉

①昭和52年度収支決算見込報告
②昭和53年度収支予算見込
③昭和53年度事業計画
④昭和53年度利用料金の改定
⑤補欠監事と改選評議員の人選
⑥協力会員校の新加入
⑦募金委員会報告

▼福與正治成蹊大学長が新たに後任監事に推挙される

▼山田良之助武蔵工業大学長の九年にわたる監事に感謝する

▼文教大学を協力会員校に迎う

小尾雋雄学長の加入要望で53番目の協力会員校となる

当ハウスの根幹はサービスである。そのためには快適な学習と睡眠に必要なセミナー室と宿舎をいつも清潔に整頓しておかなければならない。開館して一〇年を経過した頃から、諸施設・設備がようやく使用済みの傾向を示し始め、いまさらに改修期が迫まり来ったことを告げた。年毎に利用者が増加すれば利用度も多くなるし、年がたてば建物が老朽化するのは当然であるが、貧弱な法人財政は、改修工事費を予想して積立金を準備するだけの余裕がなかった。

故障は未然に防止しなければならない。利用者からの不満と不評判は当ハウスのイメージをダウンさせる結果となる。そのため勇断をもって各所の改修を行ったので、昭和52年度の営繕費は予算外に三、八〇〇万円の大きな支出をし、これがため決算は大きな赤字となった。52年度より新設した予算科目の施設改修協力金は、年額にして約五五〇万円であるから、今後はこれを主なる収入とし、それに経常収入を加えて、改修工事に伴う赤字と支出増を長期的に解決することを心がけたい。

既報のように52年度は、当面の緊急な改修として、セミナー室とユニット宿舎に重点をおき、屋根のふきかえ、内装・外装の新調を行った。これにつづいて53年度は次のような改修・補修の工事を行う方針を決めた。

(1)本館、講堂、図書館の屋根と内装
(2)教師館の便所と浴室の増設
(3)図書室書架の新増設
(4)ボイラーの補修と新調
(5)食堂調理機の新調と補修
(6)暖房・給排水の配管改修
(7)サービス・センターの内部改造

*　*

53年度は、当ハウスにとって、次の一〇年の歴史をつくる第一年目になるであろう。そのためには次のような新しい支出増が見込まれる。

(1)交友館、国際セミナー館の新設に伴う補充要員の人件費
(2)記録映画プロジェクトチーム発足に伴う製作費
(3)交友館活動プログラムの費用
(4)国際交流プログラムの費用

*　*

次に職員の待遇改善に要する人件費約七%の増額分として、一、四〇〇万円が必要である。民間給与に比べても、公務員給与に比べても、水準に達するためには七%の増給ではまだ不十分であるが、支出増の総額が約四、二〇〇万円になる見込みなので、料金改定による増収、その他の努力による増収を加えても、物件費と人件費の増額分を捻出することは難しい。年度別の長期計画をもって、赤字解消につとめ、また給与の改善を図り、さらに土地・建物の維持保管の積立金制度を確立したい。

*　*

以上のような理由から53年度予算編成に当っては各方面の意見に耳を傾け、他の施設の料金なども参考にし、協力会員校およびその教職員の負担増は極力おさえることにし、非会員校、企業、一般社会人の料金値上げを行った。しかしながらすべての利用者に対し、従来負担してもらった冬期の暖房費一夜につき二五〇円は、53年度より廃止した。

料金の値上げは別表のとおりであるが、宿泊収入増約三、〇〇〇万円、施設収入増約一、〇〇〇万円を見込んでいる。なお値上げ率において、宿舎の場合が一六%、施設の場合が三四%である。会員校が会費を負担する金額に対照して会員校以外の利用者の料金を算出したものである。さらに法人の努力目標として、52年度の利用者四万八、〇〇〇人を53年度は五万二、〇〇〇人と見込んでいる。会員校の積極的な利用を望んでいる。

▽昭和52年度収支決算見込額
一四八、九五三、〇〇〇円
▽昭和53年度収支予算見込額
一九六、八七九、〇〇〇円

（前ページよりつづく）

いるが、それらは実際に人間的な触れ合いを伴っているわけではない。この意味で、西欧的なものをいかに克服するかという場合の姿勢が第三世界のように体験に基づいたものではないことを十分認識しなければならない。第二に、西欧文明の相対化の必要性があげられる。従来の西欧文明がそのまま人類の文明であるという考えを捨て、数多くの文明のうちの一つであるという認識である。

しかし、日本は第三世界の諸国ほど西欧文明に対する批判力もないし、かといって西欧人自身ほど西欧というものを理解していない。ちょうど、第三世界と先進国との間にポッカリ穴があいているような形で、日本は何か日本的なものを再評価しなければならないが、それに徹底できないことに問題がある。けれども、国際的に諸文化の衝突が起こっている現在、日本文化の持っている文化的な相対主義というものを生かして、国際社会に対して日本が積極的に諸文化の交流と対話を手助けしていくことができるのではないかと思う。西欧で育った技術や知識というものを第三世界の人々に教える場にするのではなく、非西欧地域の諸文化の中にある叡智というものを動員して対話をする場にしようとするのが、国連大学の試みといえるだろう。

最後に結論的に申し上げたいことは、日本人が国際社会のなかで役割を果たしていくためには、仲間内と仲間外、日本人と外国人という区別を乗り越えねばならないが、問題は日本沈没をせずにどうしたら国際的に役立つ発言をし、行動をし、協力していくことができるか、ということに集約されるのである。

（第5回国際学生セミナーの全体講義より。文責・編集者）

▼千人会▲

昭和53年2～3月現在

◈現在会員は一、五〇九名です

大学生＝一、一六二名
社会人＝　三四七名

◈新しく会員となられた方々

8名（第42回報告（申込順））

C　東京工業大学助教授　福田　敦夫殿
B　ミシガン州立大学大学院　今井　哲哉殿
A　㈱外山長兵衛商店　外山　崇行殿
A　同　外山　敏子殿
C　東海大学医療技術短期大学　助手　山本よしゑ殿
C　〃　慶谷　伸代殿
C　主婦
C　中央大学非常勤講師　横山　実殿
B　広尾高校教頭　大畑　正一殿

◈会費ありがとうございます

53年2～3月（敬称略）

市川ヒロ子、最上武雄、中島力、松沢正夫、富沢賢治、斎藤勇、大友賢二、浦上要三、大岡信、吉田公保、岩佐凱実、岩本ミチ、玉田啓八、松田正一、吉田耕作、平岡勇、脇田良一、稲毛卓、蓮見音彦、伊藤千秋、岡田純一、東川清一、秋間実、久世寛信、岡村勝、鈴木昭、内海正志、高橋潤二郎、原田敬一、高松正昭、北村嘉行、松本武子、遠藤平治、佐藤頌子、石井素介、島美喜子、三神勲、井原恵治、寺中良二、板垣雄三、外山崇行、野澤晨、斎藤真、磯直道、今井裕之、高橋長太郎、上野一、馬越徹、坂本是忠、所司真理子、勢山秀子、松山正男、窪田庄十郎、小川政亮、西田貴子、西川恭治、加藤閑子、東洋、松島千代野、田辺留次郎、樫崎彰男、高橋節子、久保亮五、力石誠之介、中岡二郎、新澤雄一、石井正博、小林望、遠藤一郎、吉田修三、新保清子、金子ハルオ、広瀬一彦、公文俊平、板橋並治、山崎俊雄、永積昭、東孝彦、吉識雅夫、小林甫、谷資信、山口俊夫、一丸節夫、丹下みさを、渡辺忠市、山田昭房、一番ヶ瀬康子、佐藤直子、良知力、磯野修、宗像元介、森田悌三、海老沢義道、喜多村得也、今井哲哉、西川大二郎、荒川孝子、肥前栄一、本間仁、堀内睦子、中村妙子、飯田修一、人見宏、中島徹、笠耐、福永寿巳夫、五唐勝、村松林太郎、道本幸伸、増沢利幸、永島孝、増田四郎、永野賢、佐藤毅、大野京子、中田良平、富塚文太郎、那須宗一、藤木宏幸、山澤逸平、島田依史子、若林玄修、柴田泰比古、一松信、桜井育子、黒沼稔、谷口汎邦、牛島忠広、箕輪成男、古崎愛子、平野鉄太郎、豊田陽子、白川和雄、大西清、子安宣邦、佐久間章行、中村孝之、木村建一、宮本勉、西村章子、萩原稔、慶谷伸代、横山実、絹川正吉、土井恵美子、市川邦彦、天野一夫、村田全、山田良之助、柘植敏治、杉山逸男、土居健郎、島田治夫、小原啓義、松尾弘、飯尾右一、望月昭一、原芳男、小島慶三、大泉充郎、保坂栄一、斎藤幸一郎、有賀弘、倉沢進、高橋誠、迫村純男、西村閑也、太田淳一、平沢薫、丹羽芳雄、大畑正一、松崎義徳、丸山真男、近藤圭一、木田宏、足立美比古、小山五郎、大島太郎、内藤博、池原義郎、近藤薫樹、古川晴風、向坊隆、目黒謙次郎、渡利千波、大塚正夫、守屋美賀雄、加藤六美、佐古純一郎、石坂巌、護雅夫、池田義人、手塚喬介、藤本紘、福西基、小林弘、梶谷尚、朝永振一郎、金子靖、村田晴夫、高木亀一、瀬部孝、栗原俊記、小倉芳彦、田所光子、高瀬文志郎、三上次男、原一雄、浅野弥祐、大田未穂、吉沢四郎、工藤英明、岡村総吾、緒田原涓一、石井千尋、佐藤公孝、鵜沢巌、熊田陽一郎、浦野伊和子、坂井正廣、村田和巳、松山正男

◈千人会員からの便り

千人会が私には唯一の連絡口となってしまいましたが、ご発展のご様子を折々のニュース等で楽しみに見聞きしております。

元職員（大阪在住）　新保清子

◈

広く目を向けていたいので、機会があればセミナーに参加したいと思っています。

石川島播磨重工　内海正志

♥

子供の世話にあけくれていますが、ニュースを読んでしばし自分の時間を取り戻しています。

主婦（国立市在住）　佐藤頌子

♣

セミナー・ハウスの御発展をかげながら喜んでおります。私も明日で六一歳を迎えます。学生をつれてまたあの丘に伺いたいと思います。

玉川大学文学部教授　勢山秀子

♠

簡素ながら親しみを感じさせる誕生カードを頂き、有難うございます。無事に一年を生きたという感慨をこめて会費を送ります。

聖心女子大学教授　野澤　晨

◆

国際セミナー館の建設がすすんでいられる由、学生交流の場所として更に御発展を御祈りいたします。

婦人国際平和自由連盟
日本支部副会長　西村章子

♥

とうとう小生も四五歳になりました。ドイツにいる娘から「今後も頑張って下さい」なんていう手紙をもらう年齢になったわけです。

大阪大学文学部助教授　子安宣邦

●昭和52年度 第四回共同セミナー委員会

昭和53年3月10日
18～20時半
私学会館

52年度最後の委員会は、別記一五名の委員が出席して開催され、52年度の総括、次年度上半期の準備経過報告が行われたあと、第一〇〇回記念セミナーをめぐって種種意見が交換された。

なお、次年度の文部省補助金に即して予算案が企画室より示され、セミナーの回数、規模、学生の参加経費などについて話し合いが行われた。学生の参加経費は、二泊三日の場合、七、〇〇〇円とすることが決定された。

〔出席委員〕岡宏子、関口晃、野田春彦、村上陽一郎、江沢洋、荒川幾男、勝見允行、谷口汎邦、時永淑、原豊、山岸健、黒田道雄、佐竹寛、友部直、藤村瞬一〔敬称略〕

昭和53年度宿泊・食事料金改定表

（昭和53年4月1日実施）
単位＝円，（　）内＝改定前料金

＊食事代（定食）

朝食	昼食	夕食	計
450 (400)	550 (500)	700 (600)	1,700 (1,500)

＊宿泊料（1泊につき）
〈ユニット・ハウス〉

区分	学生	教師
会員校	1,500 (1,000)	2,000 (1,400)
非会員校	1,700 (1,300)	2,000 (1,700)

〈長期研修館〉

区分		5泊以上	5泊未満
会員校	学生	1,500(1,100)	1,700(1,200)
	教師	2,000(1,400)	2,200(1,500)
非会員校	学生	1,700(1,400)	1,900(1,500)
	教師	2,000(1,800)	2,200(1,900)
学術教育学会		2,300(2,000)	2,500(2,100)
企業・社会人団体		2,600(2,400)	2,800(2,500)

〈国際セミナー館〉

区分	5泊以上	5泊未満
学生	1,800	2,000
大学研究者	2,400	2,600
企業・社会人	2,800	3,000

〈教師館（松下館）〉

区分		大学研究者	企業・社会人
1～7号室	1人	2,700(2,100)	3,300(2,700)
8号室	1人	3,700(3,000)	4,500(4,000)
	2人の場合1人	2,800(2,200)	3,400(2,700)

第5回国際学生セミナー

主題――文化接触と日本

――大きな日本・小さな日本人――

期日――昭和52年12月16～18日

《全体講義》

国際社会のなかの日本人
国連大学副学長　武者小路公秀氏

《セクション演習》

A　日本経済成長の文化的意味
上智大学客員教授　グレゴリー・クラーク氏

B　日本の外交と文化
国連大学副学長　武者小路公秀氏

C　行動から見た日本人の価値意識
慶応義塾大学教授　鈴木孝夫氏

D　日本の技術者と技術――その文化接触における問題――
東京経済大学教授　内田星美氏

E　国際交流――文化の相違をどうこえるか――
評論家　金山宣夫氏

《ゲスト講演》

世界の中の日本
日米欧委員会日本委員長　渡辺　武氏

《運営委員》

成蹊大学教授　広野良吉氏（委員長）
早稲田大学教授　示村悦二郎氏
東京大学助教授　平野健一郎氏
早稲田大外事課長　山代昌希氏
日本学術振興会人事交流課長　阿部美哉氏

《参加学生》125名（内女子45名）

ⓐ国籍別（計16ヵ国）

日本（98）、アメリカ合衆国（6）、中国（台湾）、香港、西ドイツ（各3）、大韓民国（2）、インド、タイ、中華人民共和国、ポーランド、スイス、スウェーデン、フランス、イギリス、トルコ、アルゼンチン（各1）

ⓑ大学別（計31校）

早大（22）、東大（12）、東外大（8）、津田塾大、ICU（各6）、一橋大、慶大、東女大（各5）、東工大、筑波大、明大、上智大、同志社大（各4）、青学大（2）、東京農工大、お茶の水女大、都立大、日女大、中大、法大、立大、日大、明学大、成蹊大、武蔵大、共立女大、学習院大、工学院大、千葉大、独協大、名古屋大（各1）、他に社会人17名（うち外国人5名）

シンポジウムの広野，クラーク，金山，鈴木，平野，武者小路，示村の諸氏（右から）

◇

この国際学生セミナーは、万博基金の補助によって開催され通算五回目を迎えたが、昨年新しく委嘱された国際プログラム委員会が企画、運営に当ったセミナーとして最初のものである。

運営委員長に、広野良吉氏、委員に示村悦二郎、平野健一郎、山代昌希、阿部美哉の四氏が当り、指導教授を引き受けられたグレゴリー・クラーク、鈴木孝夫、金山宣夫三氏を加えた準備打合会で国際学生セミナーの意義と方向について協議を重ねた結果、主題を「文化接触と日本」と決定し、副題を「大きな日本・小さな日本人」とした。国際社会における日本及び日本人の行動と意識の問題を経済、外交、文化、技術、人間交流の各方面からアプローチしようと試みたものである。今後は副題を順次展開させ、「文化接触と日本」のシリーズとして開催される予定である。募集に当っては参加者の構成に留意し、外国人留学生を東南アジアに限らず、世界に広げること、および人数を制限して内外の社会人も加えることとした。参加予定者を一〇〇名としたが、困難を予想された留学生の参加も三〇名を満たし、応募総数は実に二六五名を数えた。このため日本人学生については、四年生、大学院生を優先して一一二名を選び、残る一三二名には次回のセミナーまで申込書を保留させてもらう方針をたてた。

三日間のプログラムは、セクション演習の基調となった武者小路公秀氏の全体講義で開始された（要旨は巻頭に掲載）。翌二日目のシンポジウムでは主題をめぐってセクション指導教授がそれぞれの立場から問題提起を行い、日本がその文化的特徴をどのように生かしながら国際社会で行動していくべきかについて意見が交わされた。その場合、大きな論点となったのは、〝非イデオロギー人間〟である日本人と〝イデオロギー人間〟である異民族との対応関係であり、外交のレベルでそれがどのように現われるかについて、漁業の二〇〇カイリや捕鯨、牛肉の輸入問題など具体的な例が出されて大胆な提案も試みられ、パワー・ポリティックスの国際社会の中でこそ日本人のコンセンサス作りの技術が生かされるべきではないか、という積極的意見も出された。

つづくゲスト講演は、現在、日米欧委員会の日本委員会委員長をされている渡辺武氏を迎えて行われた。渡辺氏は、アジア開発銀行の創立に携わり、初代総裁としてアジアの開発に努力されたご経験から、戦後の日本が歩んで来た道を明快に解説された。特に、経済立国に成功した日本の進路として、日本が被援助国から援助する側に立つことこそ、戦争によって傷を残した国々への義務であること、開発途上国援助といっても、先進国はボランティア精神で接すべきであり、開発の主体は開発途上国であることを強調された。さらに、日米欧委員会に触れ、先進諸国の民間人代表が自由にグローバルな問題を取り上げて討論している実情を説明された。

最終日は、午前中の全体集会で各セクションの報告が行われ、参加学生による全体の討論が活発に繰り広げられた。限られた時間の中で、今回のテーマをめぐって出された問題点を論じ尽すことは到底できなかったが、広野運営委員長のいわれるように、「個々人が如何なる思考行動をとるかは個人の自由であり、何人もそれを束縛することはできない。そして当人だけが自分の思考行動に責任を持つことになる。このような主体的個の確立があり、またそれを可能にするような社会になってこそ、初めて国際的視野に立った思考行動ができるのであり、そのような人こそ国際化した日本人、乃至国際的に通用する日本人ということができる」とするならば、この国際学生セミナーが〝主体的個の確

立〟に果たした役割は決して小さくないだろう。

◇

会期中には、前号で既報のとおり、さまざまな人間交流の場が設けられたが、ハイライトは最終日の国際交歓昼食会であろう。中越英隆君（早大）とメアリー・グラップさん（ICU）の二人が司会に当り、このプログラムに招かれた来賓とともに台湾の歌やタイの踊りが披露されるなど楽しい交歓のひとときを持って、全セミナーを終了した。

なお、参加者一同は、新築の国際セミナー館に備える備品のため寄付金を募り、スウェーデン人のカーリン・リンドバーグさんから館長に贈呈された。

〔当日の主なる来賓〕　J・L・スチュワート氏夫妻（アジア財団日本代表）、山内恭彦氏（東大名誉教授）、川田侃氏夫妻（上智大教授、当ハウス国際プログラム委員長）、岡宏子氏（聖心女子大教授、当ハウス共同セミナー委員長）、川名明氏（東京農工大教授）、チョウドウリー氏（バングラディシュ大教授）、E・グハルジャ氏（インドネシア・ド・ゴール大教授）

◆日本人再発見の場と機会を与えられて

上智大学客員教授　グレゴリー・クラーク

私にとって大学セミナー・ハウスは非常に特別な意味をもっています。四年ほど前、そこで開かれた日豪学生セミナーに招待されました。セミナーのしめくくりのお別れパーティーで日豪両国の学生代表のスピーチがありましたが、オーストラリアの代表は、セミナーは〝外に出かけて新しい友人をつくる（to go out and make new friends）〟ための絶好の機会であったと述べ、日本の代表は、〝友情の輪を広げる〟ための絶好の機会であったと述べました。その時突然に、私は日本と西洋の基本的なちがいの一つ――西洋人の〝外に出て〟関係をつくるという発想に対して日本人の自分が属している細胞またはグループを拡大するという発想――に思い到りました。

その後まもなくオーストラリアに帰り、ある日本に関する重要な会議でスピーチを頼まれました。そこでこの二つのアプローチのちがいの意味を発展させてみようとしました。しかし日本の社会のユニークさを完全に説明する――それはつまり西洋のイデオロギー的階級社会に対する細胞社会としての日本の理論を確立することなのですが――には一冊の本が必要であると思い知らされたのです。その一冊の本を書くことで私の人生が変りました。その意味で大学セミナー・ハウスに特別に感謝をしなければならないと思っています。

そしていま、二度目の恩恵を受けたことに気がつきました。第五回国際学生セミナーで分科会を一つ受け持つようにと頼まれました。そして今回の私の日本発見は前の時より数も多く、おそらくより重要だと思いました。

その第一は日本の学生の急速な変りようです。たしかに国際学生セミナーに選ばれたのは平均よりずっと優れた学生です。それにしても参加者が各自の意見を発表するその開けっぴろげでこだわりのない態度に驚かされました。ある意味で日本の学生は同じ状況での欧米の学生たちを想定した場合、彼ら以上に率直で、議論好きであったといえます。

また、日本人が自分達の社会について、そして世界における自分達の位置づけについて理解したいという真剣な願望をもっていることをも発見しました。このテーマに関する私自身の理論、日本は近年になってはじめて外国人との戦争を経験したので、西洋の〝イデオロギー〟社会とは根本的に異なっていて、それゆえに昔ながらの、ある意味で讃美すべき家族的、本能的人間関係中心の社会を保持し得たとする理論は、今はやりの日本は後進的封建的小心さを克服しさえすれば欧米諸国のようになれるという理論とはなかなか相容れません。しかし私の理論について議論して下さったみなさんの知的な寛容な態度に対して非常に感謝しています。提供していただいたアイディアやアドバイスは今後私の考えを発展させる上で大きな助けとなるでしょう。

一つ残念なことがあります。このセミナーで日本は外国から〝もらう〟ばかりだが、もっと〝与える〟べきであるという提案がなされました。しかし私は個人的に、国際関係において〝与え〟ようとしすぎることが賢いかどうか疑問に思います。この種の愛他主義が容易に国際的優越感と支配という妄想へと堕落するのはベトナムの例を見れば余りにも明らかです。しかし個人的なレベルではもちろん賞讃すべき原理です。私自身、大学セミナー・ハウスに対して、与えるよりもずっと多くのものをもらっているので申しわけないような気持です。

◆国際学生セミナーで学んだこと

安野正明

留学生の諸氏から激烈な対日批判は聞かれなかったが、多くの指摘は私たちの心の奥底を鋭くえぐるものだった。

日本人は直接経済的利害関係を持たない国には冷淡で関心がないこと、人類に何も寄与しようとせず、外国の成果をただで盗んでGNPで自己満足に浸る態度、哲学と信念を持たず目先の利益にしか集中できない対外政策等々、どれも耳に痛い言葉だった。

ここで私が痛感させられたのは、国際交流の重要性とむずかしさであった。国際交流とは高い理想と夢に満ちた仕事であろうか、私は違うと思う。どろどろとした苦しみに満ちたものであると思った。我々は自己を理解してもらうために余りに努力を怠り、外国に積極的に「与える」ことを忘れてきた。そこから生まれた溝は現在あまりに深く大きい。それを埋めるのが我々の使命であり、それには哲学だけでなく手段も伴わなければならないと思う。そして、それは決して楽しい仕事ではないのだ。

私のような非力な人間にはあまりに大きな課題ではあるが、実は私のような人間でも真剣に考えなければならない問題だと感じた。

（東京外国語大学3年）

◆大学の外で知った国際交流

チャン・タイ・ワイ

私は香港からの留学生で、いま国際基督教大学で化学を勉強しています。この大学にいる各国からの留学生の数は日本一だといってもいいすぎではないでしょう。いいかえれば、私は文化接触の最前線で毎日の生活を送っています。しかし過去の二、三年間、「国際

交流」、「文化接触」などについてあまり意識しませんでした。今度のセミナーは私に大きな刺激を与えてくれました。大学のクラスルーム、寮の生活等々で、国際交流は常時行われているということ、つまり私は特殊な実験室に生活していることを、今度のセミナーのお蔭で目ざめました。

このセミナーを通じて、一つ感心したことは、日本人の国際交流あるいは世界観に対しての意識であります。ふりかえってみると、自分の出身地香港は植民地であるので、私たち市民は、世界観とか、国際社会における地位などの意識を持てないように教育されたのではないかと憤慨します。

これからも、このようなセミナーが永遠に続くように、また、日本に限らずほかの国でも文化交流という意識を促す同様のセミナーが開かれるように祈ります。

（ICU・化学4年）

◈日本人の印象をかえた活発な討論

ゲルハルト・クレープス

日本人は普通、国際会議などの際に大変消極的であると言われています。日本が世界で経済的にも政治的にも重要な地位に立つようになった今日、これは一層強いコントラストとして目に映るようです。外国人の日本に関する知識があまりにも貧困であるという批判は、日本人の口からたびたび聞かれることですが、それはある程度まで、このような日本人自身の責任によるものであると思われます。

今回のセミナーも、ある意味で国際会議だったわけですが、私が受けた印象は今までとはずいぶん違うものでした。討論は大変活発に行われ、多くの参加者は発言をやんわりと制止されたほどでした。発展した討論は、決められた時間が過ぎても夜遅くまで、時には朝まで続けられました。これらの参加者と同じ年代の方々が、やがて国際会議に出席するようになり、この調子で活発に意見の交換を行うようになると、今まで「何も言わない日本人代表」というイメージを持たされていた世界は、きっとびっくり仰天することでしょう。

（上智大学国際関係研究所客員研究員）

◈社会人として参加して

住田友文

「文化接触と日本」というテーマに、私は大変ひきつけられた。「中東」を対象とした日頃の研究の中で、現代の国際社会の相互依存性を強く痛感していたからだ。

しかし国際学生セミナーに社会人として参加することに、正直いって当初躊躇した。立場や経験の違う人達の不毛の議論に終わるのではなかろうかという懸念がつきまといっていたのである。

だが、この懸念は、セクション演習がすすむにつれ徐々に消えていった。私の参加したBセクションは、中国、スイス、アメリカ、西ドイツの留学生を交えた大学、専攻を異にする男女学生に社会人若干名を加えた約三〇人のグループで、武者小路先生の指導の下に、実に活発な討論が展開された。

先生は種々の議論を一つ一つ丁寧に採り上げ、整理し考え方を示される。結論は必ずしも得られないこともあったが、議論はかみ合ってゆく場を得、とくに第二夜のごときは午前二時を過ぎる深更まで熱心な討論が続けられたことに感銘をうけた。

静かな自然環境に囲まれ、合宿という打ちとけた雰囲気の中で、内外の学生とゆっくり時間をかけて共通の問題を論じ、対話が出来たことを嬉しく思っている。

（中東経済研究所研究員）

第97回大学共同セミナー

故今村護郎先生追悼記念シンポジウム

主題――人間はどこまで機械か（その二）

――物質・生命・精神――

期日――昭和53年1月21～22日

◇シンポジウムの発題者◇

聖心女子大学教授　岡　宏子氏

（運営委員）

東京大学教授　後藤英一氏

東京大学教授　野田春彦氏

京都大学助教授　平野俊二氏

◇参加学生◇74名（内女子30名）

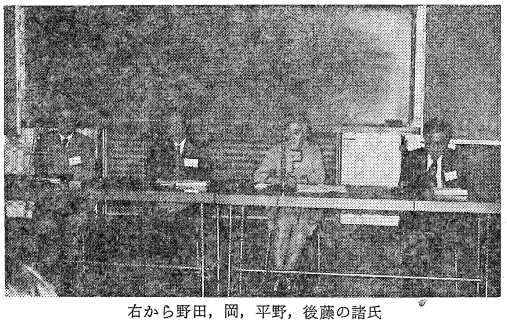
筑波大(13)、東大、聖心女大（各7）、お茶の水女大（5）、東工大、京大、慶大、ICU（各4）、静岡大、早大（各3）、都立大、桜美林大（各2）、東京医歯大、東外大、東農工大、千葉大、名古屋大、東女大、共立薬大、国学院大、日女大（各1）、その他（7）、合計21校

◇　◇

「人間はどこまで機械か」というこの興味深いテーマの背景には、近年の大脳生理学、分子生物学の飛躍的な進歩によって、生命や精神の領域にまで科学のメスが加えられるにいたったという事情がある。科学的アプローチによって今日どの程度、物と生命と心の谷間が埋められるか、この三者の関係はいかなるものかを、最新の科学の成果を踏まえた専門家たちが学際的に再検討するというのが、このシンポジウムの目的である。

今回は昨年1月同じテーマで開催した際に、生理学的心理学の立場から発題された東大助教授今村護郎先生が半年後の6月急逝されたため、今村先生を偲ぶ追悼セミナーとして企画されたものである。行動心理学を専門とするセミナー提案者の岡宏子、情報科学の大家後藤英一、分子生物学の分野で活躍中の野田春彦の三氏に加え、今村先生の最も親しい学友のひとり京大助教授平野俊二氏が、今村先生の立場をひきついで討論に参加することになった。さらにフロアーには、著名な医学者である当ハウス理事長川喜田愛郎氏も加わり、討論内容を深めるきっかけをいくつか提供した。

リユニオン・セミナーでもあるこのシンポジウムに参加した学生は、七四名のうち約半数が前回参加者であり、京都・名古屋・静岡



右から野田，岡，平野，後藤の諸氏

の各大学から八名の参加をみたほか、理科系・医科系に心理専攻をあわせて全体の八〇％以上がテーマに直結する専攻の学生であったことなどが特徴的である。生命論への取組みが、哲学的な抽象論から物理化学的な実証的研究にとってかわられているという、今日の傾向がここにもあらわれていて興味深いところであった。

シンポジウムの冒頭、自然界は物質の無限の組合せによっているもので人間も機械であるといって差支えないと明言する野田氏の発題のあと、前回その主張には承服できないと反論された今村先生の生の声がテープから流された。「現在、ないしは見越しうる限りの将来にわたって、脳の物質過程を精神現象に完全に置き換えることは私は無理だと思います。心理学と自然科学との両者には相関関係で対応づけることが可能であっても、双方に因果関係があるかと申しますと非常に難しいと思われます」と、静かに説得するように語りかける故人の意志を継いで、平野氏は物理用語と心理学的タームとのカテゴリーの相違を強調して、精神現象を物理語によって記述することの限界を主張した。後藤氏もまた、人間の知能には物質タームとは独立な固有の記述がありうる、と機械論に疑問を投げかけて機械の定義にふれた。機械には物質、エネルギー、情報という三つの柱があり、それらの機能を再現することが可能なブラックボックスを通常は機械と称していて、入出力のはっきりしない人間の場合は機械と定義することが難しいと暗示した。

これらの議論に対し、フロアーの川喜田氏は、アリストテレス以来の「生命」には魂や心といったものが含まれており、魂から切り離して論じられるようになったのは二〇世紀に入ってからのことであると、歴史に溯って生命の定義を明らかにし、議論の焦点をいっそう明瞭にさせた。学生たちもいつになく高揚し、半数もの学生が発言して活発な質疑が交わされた。

昨年のセミナーでは、「そのテーマの大きさ、知識の多様さの前に、戸惑い、混乱し、残念ながら統一した見解の得られぬままに、あっという間に三日間が過ぎてしまった」というのが大方の参加学生の感想であったようだ。しかし一年経ったこのシンポジウムでは、前回の問題提起を受けて進められたためか、あるいは岡氏の巧みな司会によるものか、亡き今村先生の陰の力であろうか、いずれにしても争点の一つの方向がくっきりと浮き彫りにされたことは確かなようである。これは、一年の準備期間をもった参加学生が、それを有効に生かしたというリユニオン・セミナーの成果を物語るものである。

二日目の午後は、別記のように今村令子未亡人も出席されて、今村先生の人と学問を偲ぶ追悼会が行われ、参加者一同哀惜の念をあらたにするとともに、故人とその業績を、セミナー・ハウスがいかに遇するかを学び取ったようである。

送別パーティーの席上では、前回今村先生の指導を受けた学生たちに、先生の遺稿となった論文「行動と脳」が令子夫人から贈られ、学生たちからはあたたかい励しと感謝の拍手が返された。

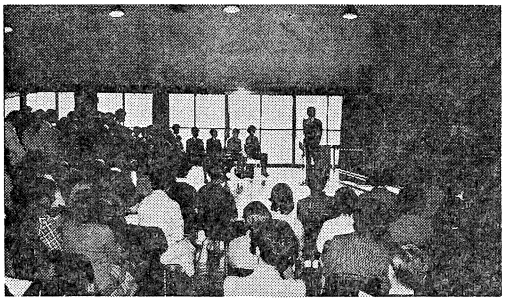
岡先生はセミナーを終えるにあたって、「また己が専門の井戸掘りに邁進しよう」と呼びかけたが、昨年を合わせて延べ五日間にわたる学際シンポジウムの成果は、参加学生ひとりひとりの今後の勉学に自ずとあらわれてくるものと思われる。

故今村護郎先生追悼会

昭和53年1月22日

当ハウスは、これまでにも生前のハウスに対するご奉仕に感謝するため、ゆかりのある先生方の追悼セミナーを開催してきた。いわばセミナー・ハウス方式の追悼会である。

昭和52年1月に開催された第98回大学共同セミナー「人間はどこまで機械か」において、「精神の自然科学的アプローチ――その限界について――」と題するセクションを指導されたのは、指導教授のなかでももっとも若かった東大助教授今村護郎先生であった。そして、この年若き学者が、半年後に急逝されてしまったのである。



追悼のことばを述べる池田君とセクションの学生たち

当ハウスは、もっともふさわしく先生を追悼する方法として、別掲のように昨年と同じ主題の下に一泊の追悼記念シンポジウムを企画した。二日目の午後二時より、今村令子未亡人と故人の学友二名、教え子九名、そしてシンポジウム参加者が出席して追悼のひとときがもたれた。

会場の講堂には花に包まれた生前の写真が正面に飾られ、国立音大四年、阪本祐子さんのピアノが奏でる葬送行進曲で厳かに開会、追悼のプログラムは企画室主事・飯田能子の司会で進められた。

まず、飯田館長から開会の挨拶と哀悼の辞がのべられ、次いで二つのセミナーを企画し、指導者として今村先生を選ばれた岡宏子氏から生前の故人が紹介された。ここで一同は、録音テープで流された故人の肉声に耳を傾け、故人が最も愛好された、ベートーベンのロマンスへ長調を国立音大四年・西村陽子さんのヴァイオリンで聴き、哀惜の念を新たにした。

引きつづき、学友であられた京大助教授平野俊二氏、専修大教授金城辰夫氏、そして故人の最初の愛弟子である専修大講師東条正城氏から追悼のメッセージが語られた。それらの思い出から偲ばれたのは、故人の真摯な学究態度であった。さらに、昨年のセミナーで今村先生に直接学んだ学生を代表して、静岡大の池田君が「先生の思い出からさらに多くのことを学んでいきたい」と感謝の気持をあらわした。

ベートーベンの「田園」が静かに流された後、今村令子夫人が挨拶に立ち、出席者にお礼のことばを述べられた。

この後に食堂で行われたお茶の会では学生から今村夫人に花束が贈呈され、夫人は出席者の励ましの拍手に送られて会場をあとにされた。

＊　＊　＊

私の大学生活と大学セミナー・ハウス

―卒業に際して一言―

❶私の年輪＝参加した共同セミナー

笹川　真理子

自己の欠点を補充する日々であった浪人時代を終え、大学生活に足を踏み入れた当時、私は真に自己を高める学問への希望にあふれ、また進路を変更したのが要因で、入学した大学だけが学びうる唯一の大学ではないと強く思っていた。幸いなことに大学一年の秋に大学セミナー・ハウスと出会うことができたのも、その主旨に共鳴する同じ振動数で、若い情熱と不安にうち震えていた大学生の一人であったからなのかもしれない。

それ以来、大学セミナー・ハウスの「学生年輪の会」にはいってずっとおつきあいを続けているのだが、今までに参加した共同セミナーは、まさに私の大学生活の年輪であるように思われる。四年間を無為に過ごさないために（本音はつんどくの本をふやさないために）、一年ごとに自分の思索課題を決めていたので、参加したセミナーはその課題を解く絶好の機会に他ならなかったからなのである。

英文科に入学し、いよいよ英語と四つに組み合うことになって、突然私は、自分が日本人であることを発見した。で、最初の参加は「人間と言語」であり、鈴木孝夫先生について、ことばと文化を考えた。二回目は、英文学に専攻を決めた直後だけに、英文学の背景として知らないではすまされぬ、ギリシャ神話と聖書の広大、深淵な世界の門をたたき、「神話・文学・聖書」に出席。久保正彰先生のもとでオデュッセイアを読んだ。三回目は「西欧精神の源流」。そのころイギリスのヴィクトリア朝研究をしていて、時と所を限ってみて、また逆に西欧諸国の関連、歴史を感じさせられてのことだった。

このように年輪を刻むことを教えて下さったセミナー・ハウスには感謝の言葉もなく、大学院に進学した私は、これからもセミナー・ハウスや他大学での聴講などを通して学ぶ機会をとらえては、ひたすら自己の年輪を増してゆきたいと思っている。

（津田塾大学英文科52年卒）

❷かけがえのない場―単科大学の学生として―

山之口　誠人

私と大学セミナー・ハウスとの付き合いは、大学四年の春に始まります。それまでの私は、東京農工大学農学部林学科という一つの専門領域・学内気風の醸し出すエートスの中で、時にはまともに、その実多くは怠惰に身を任してしまい、いかに早くその水に慣れ、いかに楽して専門を身に付けるかを追い求める毎日であったといえます。そしてまた、現在でも私自身いわゆる専門バカといえるほど専門を身に付けたわけではないのですが、すでにその環境それ自体が学問的セクショナリズムに陥っていこうとする危険性が、農工大を始めとする理工系の、それも単科大学には特に強いのではないでしょうか。つまり公害・自然破壊の常態化という現代科学技術文明の危機を迎えた今、学部学科領域に囚われない広い視野の確立が現在の学生に等しく要求されている中で、総合大学の学生以上に、理工系単科大学の学生には、いわゆるインターディシプリナリーな討論を行える場というものが必要であると思うのです。そしてまさにこの学際的討論の格好の場として大学セミナー・ハウスは、存在しうるのです。これが、国際学生セミナーを含む三回のセミナーに参加した私の感想です。

ただ農学部に籍を置く者としては、共同セミナーのテーマの中に農業や林業や漁業をテーマとしたものが見られないことを残念に思います。これまで開催されてきたテーマの多くは人文科学・社会科学・自然科学のいわゆる純学問的領域が中心とされ、農学・林学そして工学というようないわゆる実学の立場というものが、逆に他の領域の人々に知られていないということも現実の日本の状況ではないでしょうか。林学という実学に携わる一学徒として、こうした角度からのセミナーが開催されるよう希望して、私の大学セミナー・ハウスへの感謝としたいと思います。

（東京農工大学農学部52年卒）

●第1回『学生年輪の会』のつどい

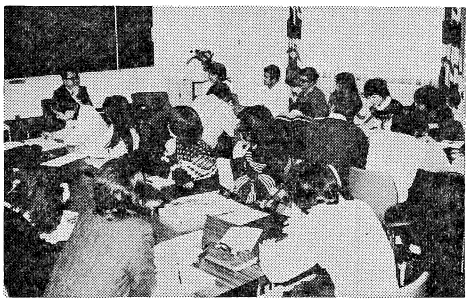
―卒業生の門出を祝して―

「学生年輪の会」は、利用の学生と当ハウスとの間に連帯感が生まれ、信頼と協力が永くつづくことを目的に、昭和49年5月に発足した、いわば学生版千人会である。主に共同セミナー参加者が会員となっており、年度毎に登録が行われるため、昭和52年度の会員は一三三名であるが、会員の中には卒業と同時に千人会に移行するケースもある。この前身に開館当初組織された「学生奉仕グループ」、そこから発展した「七葉会」があり、自主ゼミや奉仕活動も多く行われていたが、「学生年輪の会」としての活動は、今回が初めての試みであった。

手始めに会員相互の親睦を図り、今後、この会が活動をしていく上での足がかりを作る意味で、3月4、5日に一泊セミナーが企画された。講師には増田四郎一橋大学名誉教授、江沢洋学習院大学教授をお迎えし、二〇大学から三七名の学生が参加して、「大学と人生―社会へ巣立つ人の為に―」という主題のもとに、四年生の〝追い出しセミナー〟という形で進められた。

このつどいの企画、運営に携わった有志の一人、竹花弘君（東工大三年）の手記によると、「増田先生は生きがいは自分で発見せよ、とのお話を皮切りにOECDレポート『日本の社会科学政策』をもとにして、日本でなされてきた近代化の問題点、先生の提唱されるバウム・クーヘン説による日本と西欧の比較などに言及され、さらに学生の質問に答えて、学問における価値、地域と国家の関連、セミナー・ハウス設立の理想と現実などについてお話しくださった。江沢先生は岩波新書の『年代を測る』をもとにして、先生独自の名講義の定義に始まり、物理学観、読書論、大学論や学問研究に対する見方などを親しみやすい語り口で話された。また赤ん坊に歩行器を使わせると一見歩きやすいようだが、実は自力で歩く訓練の妨げになるという例をひいて、『大学に頼らず、自力で学べ』とのお話をされた。」

二日目、パーティ形式の昼食会の席上では、館長の手から増田先生直筆の色紙が四年生一一人にプレゼントされ、歌、ゲーム、フォークダンス、そして野外でのスポーツに興じて散会した。



江沢洋学習院大学教授のお話を聴く

寄付金報告

53年3月末現在

◈開館十周年記念事業寄付金

第七報（53年2～3月）

10,000円　千人会員　今井　栄殿
ミシガン州立大学大学院在学
（慶応大学卒）　今井哲哉殿

五〇,000円
日本長期信用銀行　藤本　紘殿

◈一般寄付金

三,六五円　東京電力原子力開発
本部研修生一同殿

五,七一〇円　東京大学法学部大学院
有賀ゼミ殿

四〇,000円
円谷プロダクション　岩坪優殿

五,000円　青山学院大経営学部
羽田ゼミ　羽田三郎殿

◈植樹寄付

10,000円　千人会員　佐藤頌子殿

八,000円
国際基督教大学宗務委員会殿

一五,000円　専修大学望月ゼミ殿

◈館長喜寿祝準備基金

三〇,000円
茶道教授　矢内喜久子殿

◈現物寄付

紅梅一本
法政大学安井ゼミ一同殿

お花台一個
当ハウス元職員　桐生冨久殿

酒器二揃
当ハウス館長　飯田宗一郎殿

もくれん一本　武蔵大学横武会殿

はぜ一本
東京大学教授　大内　力殿

▽△

先日は千人会より誕生祝いのカードをお送り下さり有難うございました。

ところで2月下旬の日経新聞に国際セミナー館建設の紹介記事が出ておりましたが、完成の折は是非千人会に案内状をいただければと思います。

私事に亘りますが、昨年暮銀行内の懸賞論文に入選し賞金が手に入りました。何に使おうかと考えておりましたが、幅広い見方を養う機会を与えてくれたセミナー・ハウスと大学四年の折読書会を指導していただいた西村秀夫先生の働いておられる北海道のリハビリテーションセンターに五万円ずつ寄付することにしました。残りは自分の今後のために本代にでも充てようと考えております。

国際セミナー館建設にあわせ十周年記念寄付金をやっておられると思いますので少額ではありますがお受取り下さい。

最近もセミナー・ハウスの人達との交流は続いております。昨年は白井先生と芳山君、桜井さんなどとやきもの作りに瀬戸へ旅行いたしました。永いおつきあいになったものですね。

3月26日　藤本　紘

飯田宗一郎先生

寄贈図書

昭和52年12月～53年1月

「国際交流」No. 15.「米国における日本研究」　国際交流基金殿

「新医学序説」　吉利　和殿

「感性の覚醒」「哲学の現在」「劇的言語」　中村雄二郎殿

「企業行動理論の方法的基礎」「Collected Papers on Word Order and Infinitive in English」　学習院大学殿

「日本工業の地域構造」　地域構造研究会殿

「苦悩と不安の現象学」「文化精神医学入門」「精神病理学入門」　荻野恒一殿

「択一憲法の解明」　斎藤　寿殿

「漂泊と定住と」　鶴見和子殿

「色めがね西洋草紙」　木村尚三郎殿

「永劫の断片」　安井　郁殿

「宣長と篤胤の世界」　子安宣邦殿

「土地問題の政治経済学」　早川和男殿

「新財政法学・自治体財政権」　北野弘久殿

「社会学論叢」No. 70「大正および大正人」第3号　笠原正成殿

「採集と飼育」12～1月　日本科学協会殿

「ことばと文化」「Language in Japanese Society」　鈴木孝夫殿

「量子物理学の展望」上巻　江沢　洋殿

「エナジー対話—生のかたち」　エッソ・スタンダード石油殿

「金融経済」一六五～一六六　金融経済研究所殿

「歴史の方法」　色川大吉殿

「物理数学へのガイド」山内恭彦殿

「平和の思想史的研究」宮田光雄殿

「近代医学の史的基盤」上・下巻　川喜田愛郎殿

「大学時報」一三七　日本私立大学連盟殿

「労働者自主管理研究」No. 1　労働者自主管理研究会議殿

「ホモ・クッエレンス」柏原啓一殿

「はちおうじの教育統計」　八王子市教育委員会殿

「日本経済の条件」　力石定一殿

「現代の社会主義経済」佐藤経明殿

「神話・文学・聖書」　川島重成殿

「毛沢東社会主義建設を語る」「毛沢東政治経済を語る」「中国石油」

「中国社会主義経済の理論」　矢吹　晋殿

「ラッセル思想と現代」　牧野　力殿

「SSI Journal」31　早稲田大学システム科学研究所殿

▼就職にあたって

—学生から職員への道—

久保俊子

「人間というものは、意外に、一番大切なことを偶然から決めるものですよ。」

今から三年半前の法学部新入生歓迎式で、西原学部長は、祝辞の中でこのようなことを言われた。その時、それほど実感を持って受けとったわけでなく、当時の私にとっては、大学の学部長は、神様に近い存在であり、そういう偉い先生がおっしゃることならきっとそうなのだろうという程度だったというのが本音だと思う。むしろ、大切なことが偶然から決まるなんてと、怒りを感じたから印象に残っているのかもしれない。

大学セミナー・ハウスとのつき合いも、すでに三年近くになる。もともと忘れられない思い出を作ろうと思って参加したのではないが、たいてい良い思い出を胸に帰ることが多かった。それは、幼い日、博物館や映画や童話で感じたワクワクするような何か——に通じるような気がする。そして、気がついてみたら、セミナー・ハウスの存在無しに、私の大学生活を語ることができないほど、大きな比重を占めるようになっていたのである。

人を知ること、世界を知ること。言葉にすれば短いが、この道は遠く深い。十代の頃はわずかな小説や新聞の知識から一端の「大人」になったような気がしていたが、大学をあと半年余りで終えようとする今、遙かなるこの道を前にして、むしろ不安と恐れさえ感じる。それに、受験が常に頭から離れなかった高校生活から、試験は年に一回、一年のうち半年は休日、授業の出欠は語学以外とらない、というような今の学部での生活を四年近く続ける間に、世の中には、一人の人間の知らないことの方がはるかに多いことを、さまざまな人から教えてもらった。日が昇り、日が沈む、その二十四時間の間にも、ひっそりとであるかもしれないが、さまざまなドラマが何十億という人々の胸に進行している。

私もヨタヨタしていて、あぶなっかしい歩き方しかできないかもしれないが、その道に向かって一歩踏み出してみたい。それには、自分の気に入った職場で、性に合うような仕事をするのがいい。仕事といっても、今のところ、正確には自分の適性を判断することはできないが、職場のいろいろな方達に教えていただけば、そのうちわかってくるだろう。

大学セミナー・ハウスはようやく十年余の道程を越えたところだ。この歴史には、創立の苦難を始め、多くの困難が伴ったことだろう。しかし、これといった資源もなく、食料もかなりの部分を海外に頼っている資源小国日本にとって、人を育てる仕事は最も大切な、また最も切実な課題を背負った仕事であるように思う。

私と大学セミナー・ハウスの出会いは偶然から始まる。けれども、この偶然は素敵な偶然だったと思っている。

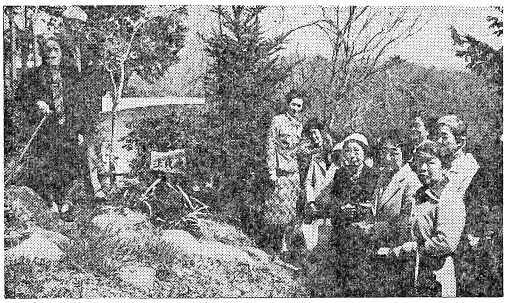
（早稲田大学法学部52年卒）

●事業部だより

＜2～3月の利用状況＞

●2月はゼミ回数九九、宿泊延人数三、五九四人。従来利用率が下降する厳寒の2月であるが、昨年同様延三、〇〇〇人を大幅に超えた。そして3月も、回数で全体の約七〇%を占める会員校の利用に加え、春休みを活用しての語学研修グループの長期滞在もあり、ゼミ回数一〇九、宿泊延人数四、四二七人と夏に次ぐ活況を示した。

●毎年学年末の2、3月は、ここに集うグループそれぞれに一年間の総括・反省があり、また別離と新しい出発を前に師弟間に一層密度の濃い知的交流・心の交流が繰り広げられる季節である。先ず、今年も「卒論発表」を目的とする集会が少なくなかった。卒業研究の成果と苦労を学友と分かち、反省し、教官の指導を受ける機会であるが、多くは卒業前最後の合宿となるから、惜別の思いのうちに親交を深めたことであろう。2月中には青学大（経）、早大（社）、神奈川大（工）、都立大（工）、早大（商）、日大（理工）、芝浦工大（建）の七グループ、3月には東大（教養）、電通大（経営工）、横浜国大（教育）、東大（経）、東大大学院（比較文学・比較文化）の五グループ――参加の教官・学生の数は延五二〇人を数えた。ここ数年の開催ですっかりこの季節の常連となった東大教養学科自治会主催の「卒論合宿」には二、三年生も多数参加しており、先輩の研究発表や苦心談から卒論への取組み方を学んだ。



上代たの先生と日本女子大図書館友の会の人たち（上代池で）

●その他各大学のゼミ、サークルやクラブ活動も一年を締めくくり、新学年に向けて始動するためにここでの共同生活を選んだ。「ゼミ総括」「ゼミ成果の発表と卒論指導」「一年間の反省」「卒業する四年生と共にクラブについて考える」「今後のクラブの運営と幹事の引継ぎ」（文化会や体育連合会等の）、「各クラブ新幹事の交流」「新入生歓迎に向けて方針を協議」――などを「利用の目的」とするグループの数が年々増えている。そして3月も後半には早くも「大学院新入生オリエンテーション」（早大・建築工学）、「新ゼミ生を迎えての勉強会」（青学大・経営）などが登場し、新鮮な息吹きの中に、また一年のサイクルが始まるのである。

●3月には、52年度に実施された大学共同セミナーの二つのセクションが〝ポスト・ゼミ〟を行っている。「国際問題研究会」と「科学史研究会」であるが、前者はICU準教授横田洋三氏が指導されたもの、後者は東大助教授村上陽一郎氏が指導されたものである。

今回の〝リュニオン〟はともに今春卒業するメンバーを祝福する機会でもあった。そして、それぞれ世話役をつとめた前者の脇誠（早大）、後者の有末賢（慶大）の両君が共通に語っていたことは、「今後も引続きこれらの卒業生の参加を得て、この研究会を学生と社会人の交流の場とし、それによってより生活に根づいた学問を求める場として発展させて行きたい」ということであった。

●ゼミの教師への感謝をこめた記念植樹が、2、3両月に一つずつ行われた。2月17日法大・安井ゼミ（国際法）が、安井郁教授のこの春の退官を記念して、紅梅一株を植えられた。安井ゼミは当ハウスで通算一五回実施されたことになるが、最終ゼミの参加学生一一名による記念植樹であった。その学生の一人吉岡輝明君がその後よんだ歌一首が「朝日歌壇」（3月19日掲載）に寄せられている。

セミナーの庭に植えたる紅梅も
花綻びて君を待つらん

そして、同歌壇の選者はその「評」の中で次のような解説を加えている。

「……この作には『指導教授の好きな紅梅を卒業記念の合宿所であるセミナー・ハウスに植えてきた。教授は入院加療中だったが、今頃はつぼみが開いているだろうか。皆が教授の元気になられるのを今か今かと待っている』と付記されてあった。師弟間に通うあたたかい心を偲ぶ」。

3月11日にはこれも常連の武蔵大・横山ゼミの一二名が持参のもくれんの木を植えられた。横山定雄教授の約一年間にわたる海外研究への出発と旅先の無事を祈っての記念植樹であった。

＜交歓会寸描＞

●2月18日＝夕食交歓会に七グループ一三三名。鈴木二郎都立大教授、新澤雄一早大教授スピーチ。海外青年協力隊東京OB会メンバーの体験談と歌。法大・安井ゼミ有志の音頭とギターで全員の合唱。

●3月4日＝第1回「学生年輪の会」のつどいを含む六グループ（三一大学）一六〇名が夕食時に交歓。館長あいさつの中で今年古希を迎える増田四郎一橋大元学長を紹介。成蹊大文化会、青学大聖歌隊が踊りや歌を披露。

●3月16日＝夕食時に一一グループ一八〇名が交歓。石橋秀雄立大教授スピーチ。青学大理工学部聖歌隊が佐藤元洋宗教主任指導で美しい合唱を披露。

●3月24日＝長期滞在の語学関係三グループ――語学教育振興会（COLTD）、英語教育協議会（ELEC）、日女大シェイクスピア・ドラマ・ゼミ――計一一五名が昼食時に交歓。各グループ代表による紹介の後、英語と仏語による合唱、日女大学生が練習中の英語劇「一二夜」の一部を熱演。

＜キャンパス・トピックス＞

●2月4～6日、青年法律家協会主催の第1回人権研究交流集会が開催された。宿泊者二一五名に一般参加者を加え三五〇名の大集会。学生時代当ハウスを利用した参加者も約二〇名。

●2月21日、オックスフォード大極東研究所長リチャード・ストーリー教授夫妻が丸山真男先生夫妻の案内で来館、落成間近い国際セミナー館など当ハウス各施設を興味深く見学された（前号に写真掲載）。

●3月27日、日本女子大図書館友の会の会員約二〇名が当ハウスの見学に来館。会長の上代たの先生も元気な姿をお見せになり、花に彩られた丘を館長の案内で廻られ、現在の発展ぶりに満足しておられた。

●館長日記から

目に青葉、五月は緑一色の丘になる。毎年見ている風景であるが若葉から青葉に移るときの緑がことのほか美しい。雑木林の中を歩いている学生達の姿はまさに青春そのものである。◆3月27日、上代たの先生が本当に久しぶりでご来館され、職員一同心から歓迎した。日本女子大学図書館友の会の会員二〇名とご一緒に構内を一巡され、食堂で昼飯を共にし、午後は遠来荘で一同お別れのお茶をいただき、歓をつくし、感慨を深くして帰られた。郷里島根から移植された彼岸桜は立派に十年の成長をとげ中央庭園の記念樹となっている。八十路を寿ぎ六群宿舎の中庭につくった上代池は、年を経て多摩の丘の野草となじんでいる。教え子達と上代池の前に立った先生の姿には友垣の中で芳香を放っている風情があった。◆4月21日、洋画の大家小島善太郎老画伯ご夫妻の来訪をうけた。案内役は東京シューズ会長、千人会員小俣喜久治氏。その同行者は八王子在住の行近壮人画伯。老先生は最近まで約四〇年、八王子加住に住居され、多くの名作をものされただけに、多摩の自然をこよなく愛し、その観察はこまやかである。八六歳の高齢なれば歩行不十分、手少しく不自由なるも健康にして談論にたのしまれた。多摩の丘となじみ合っているセミナー・ハウスの建物群がつくり出している美をこの芸術家の眼は捕えたらしい。真理を粗末にしないこの老芸術家から我らの丘が多摩独特の美しい自然の中に存在していることを教えられた。◆4月26日は早朝から麒麟麦酒社長佐藤保三郎氏の視察訪問を迎えた。目下新築中の交友館の現状とその中のサロンのできばえを視るのが目的である。初めてこの丘にのぼり、セミナー・ハウスの実体にふれ、理想と現実に合点されたらしい。百聞するよりも一見するほうがまさっているとはこの一事が示している。この実業家との出会いをセミナー・ハウスは幸運としなければならない。◆4月30日、東京女子大学創立六〇周年記念式典に出席した。折悪しく雨天で、この大学の美しいキャンパスを散歩しないで帰った。うれしかったのは、私がこの大学に勤務した頃の同僚、図書課長樋口美智恵さんが勤続三一年の表彰をうけたことである。驚くことに、勤続二〇年以上二七人のうち二五人は旧知の人達である。私は数名の方とよろこびの握手をしてこの日の栄誉を祝った。私はこの大学と出会ったことを妙とし感謝している。◆声をかけると学習院、駒沢、中央、芝浦工業、東洋、法政、立教の学生であることがわかる。なくなったとはいってもカラーはあるものである。5月15日、さつき晴れの午後、緑の中を散歩したときの感想である。

●利用状況

2月＝三、五九四人
3月＝四、四二七人

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
＊＊＊＝同月4回利用

■2月

東京薬科大学教授　坪井　實
中央大学教授　島崎　晴哉
東京大学教授　松尾　浩也
明治学院大学教授　川本　彰
東京都立大学助教授　中本　正智
明治学院大学教授　畑井　義隆
中央大学講師　奈良　俊夫
中央大学助教授　中村　達也
東京薬科大学生活協同組合
共立女子大学日本民話研究会
青山学院大学教授　西村　克彦
駒沢大学教授　阿部　肇一
青山学院大学教授　小林　望
武蔵工業大学講師　野崎　喜嗣
明治大学助教授　田中　政男
駒沢大学教授　中原　章吉
武蔵大学体育連合会リーダースキャンプ
駒沢大学教授　田中　良昭
津田塾大学E・S・S
立教大学福音キリスト者聖研会
明治大学教授　大島　田人
上智大学講師　フランク・ハウエル
青山学院大学助教授　寺東　寛治
早稲田大学講師　東後　勝明
明治大学助教授　牧野　誠一
明治学院大学グリークラブ
早稲田大学助教授　常田　稔
東京都立大学助教授　鴇田　忠彦
東京大学教授　有賀　弘
駒沢大学講師　谷敷　正光
東京大学教授　青井　和夫
早稲田大学教授　西宮　輝明
法政大学教授　北川　隆吉
武蔵大学教授　横山　定雄
法政大学ユースホステル研究会
神奈川大学助教授　北岡　正敏
明治大学教授　原　正彦
上智大学教授　鶴見　和子
立教大学教授　大橋　泰二
東京都立大学助教授　堀川　浩甫
東京工業大学助手　三木　千寿
東京都立大学教授　鈴木　二郎
東洋大学教授　金岡　秀友
日本大学助教授　榛沢　芳雄
早稲田大学教授　新澤　雄一
東京大学教授　新堂　幸司
東京都立大学助教授　鳴沢　実
東京都立大学教授　三浦　武
東京都立大学助教授　下田平裕身
法政大学教授　安井　郁
芝浦工業大学教授　十代田知三
東京学芸大学教授　阿部　猛
東京学芸大学教授　大久保典夫
東京学芸大学教授　中村　格
一橋大学教授　片岡　信二
津田塾大学社会科学古典を読む会
東京学芸大学教育学部自主ゼミ
青山学院大学助教授　古銭良一郎
東京外国語大学教授　竹内与之助
法政大学教授　西川大二郎
東京都立大学教授　関口　晃
明治大学助教授　渡辺　昭夫
東京薬科大学受験生＊
富士短期大学助教授　平野　文彦
創価大学講師　高橋　宏幸
東京都立短期大学助教授　斎藤　芳郎
千葉大学助教授　楠本捷一郎
拓殖大学第一高等学校
クリスチャンAVセンター
青年法律家協会
松本亨英語教育研究会
海外青年協力隊東京OB会
日本自然保護協会
カトリックボーイスカウト指導者協議会
東京電力
千野製作所
日本電気コストコンサルティング
日本水産＊＊＊
東京システム技研
日本印刷技術協会
西東京三洋販売
日本化薬
日野協力会
多摩中央信用金庫
日電バリアン
山村硝子＊
郵政省簡易保険局
京王プラザホテル
光印刷

第99回大学共同セミナー予告

【主題】藝術のたのしみ
―美術・音楽におけるヨーロッパ・ルネッサンス―
【期日】昭和53年7月14～16日
△指導教授▽前川誠郎、遠山一行、戸口幸策、鹿島享、荒木成子、友部直の諸氏

【個人利用】
コロンビア大学教授 リチャード・ロングマン

■3月
お茶の水女子大学ユネスコ研究会
東京薬科大学講師 能美 啓子
成蹊大学教授 福田 喜三
東京薬科大学教授＊ 志田 信男
早稲田大学教授 小林 寛
筑波大学教授 臼井 勝美
中央大学講師 佐藤富士雄
横浜国立大学助教授 岡田 守弘
東京学芸大学助教授＊ 鈴木日出男
東京大学助教授 平尾 浩三
青山学院大学法学部自主ゼミ
東京経済大学教授 入江 敏夫
成蹊大学文化会
青山学院大学講師＊ 佐藤 元洋
駒沢大学助教授 桑原 洋
東京都立大学助教授 山住 正己
立教大学助手 小森田秋夫
東京大学助手 中里 明彦
慶応義塾大学英語会
東京都立大学助教授 慶谷 壽信
東京都立大学教授＊ 金子ハルオ
杉野女子大学教授 田村 皖司
武蔵大学教授 横山 定雄
中央大学教授 那須 宗一
電気通信大学助教授 狩野 紀昭
明治学院大学教授 新田 孝二
東京都立大学助教授 水林 彪
東京学芸大学助教授 小町谷照彦
東京学芸大学教授 小林 弘
東京学芸大学助教授 山口登志子
横浜国立大学助教授 佐々木弘明
早稲田大学同人誌「風輪」
東京大学教授 青井 和夫
東京薬科大学教授 坪井 實
東京学芸大学教授 関 四郎
東京経済大学助教授 福應 健
一橋大学アイセック
早稲田大学教授 示村悦二郎
立教大学教授 石橋 秀雄
早稲田大学教授 田村 恭
一橋大学助教授 依光 正哲
中央大学助教授 村越 邦男
東京工業大学教授 松田 武彦
東洋大学講師 高橋 清志
日本大学教授 中島 邦男
東京大学教授 芳賀 徹
東京大学助教授 梅沢 豊
一橋大学歴史科学研究会
国際基督教大学ファカルティー・リトリート
法政大学教授 横田 澄司
中央大学教授 丸尾 直美
専修大学教授 望月 清司
中央大学経済学サークルゼミ
日本女子大学教授 徳末 愛子
明治大学教授 坂本 清
東京経済大学婦人問題研究会
東京大学教授 城塚 登
早稲田大学教授 松田 正一
明治学院大学講師 遠藤 興一
早稲田大学教授 原田 俊夫
早稲田大学マーケティング研
慶応義塾大学助教授 長島 昭
法政大学教授 野田 正穂
神奈川大学教授 小山吉之助
法政大学教授 大谷禎之介
東京経済大学書道部
東京経済大学教授 末岡 俊二
青山学院大学教授 羽田 三郎
早稲田大学講師 岩本 一美
桜美林大学教授 相馬 順一
東邦大学講師 坂口 耕史
昭和大学講師 喜多村得也
北海道大学助手 島本 義也
玉川大学教授 沼野 一男
和光大学英語教育サブゼミ
独協大学助教授 千代浦昌道
独協大学教授 長谷部加寿子
国立武蔵看護学校
青山学院高等部宗教部
第1回「学生年輪の会」のつどい
科学史研究会
国際問題研究会
東京スクールオブビジネス
松本亨英語教育研究会
お茶の水キリストの教会
日本赤十字語学奉仕団
語学教育振興会
すみれ幼稚園
英語教育協議会
文学教育研究者集団
新東京日産自動車販売
山村硝子＊
戸塚法律事務所
日電バリアン＊
松下電器全国ナショナル販労連
A・D・O（全日本デパートメントストアーズ開発機構）
日本化薬
日本マネジメント協会
【個人利用】
慶応義塾大学学生 坂本 達哉
山梨県立女子短期大学講師 原田たり子
東京学芸大学講師 阿部真美子
慶応義塾大学学生 山川 陽子
白梅学園短期大学教授 田中未来

■編集後記

既報のとおり、本号は昨年12月に実施した第5回国際学生セミナーに紙面を多くとって編集しました。なお、6月の国際セミナー館落成記念行事に合わせて、同セミナーの報告書を発行の予定です。

斯学研究50年、柳田國男賞に輝く昔話集の決定版！

日本昔話大成 全12巻

第一回配本 絶賛発売中 第二巻 本格昔話(一)

婚姻譚を主とした巻。ここには信仰・行事・慣習・社会制度が反映されている。

関敬吾

■定価・各巻 二、四〇〇円
■一時払特価二六、〇〇〇円
（締切り＝6月末まで）

《特色》
●代表話例は、資料性を重視して原資料を損うことなく掲げた。●類話は要約して収め、出典及びページを付した。●収録しなかった類話についても出典及び話数を記し、文献と詳細な注を付した。●諸外国との比較研究のため、AT番号を示し、近隣諸民族に伝承される類話も要約して収めた。

配本＝第2回・5月刊
第3回以降隔月刊

体裁＝A5判・特製クロス装・函入
本文三〇〇～三五〇頁

角川書店
東京都千代田区富士見2－13－3